

禮運第九

HEAD

(岩倉紙芝居館古典館 <http://hjueda.on.coocan.jp/koten/koten.htm> 宰主 上田啓之)

礼記 新釈漢文大系 明治書院 竹内照夫著 禮記、上卷、禮運第九を読む。竹内氏による解説を中心に由来をみてみたい。

この書は、漢書芸文志に、漢の武帝の世の末、孔氏の旧宅から尚書、論語、孝経などと共に発見されたとある。この原本は百三十一篇とも二百四篇ともされるが、失われて定かでない。儒教が国教となると、礼書として編纂されたもののなかで、昭帝から宣帝にかけての世（西紀前一世紀中期）に編纂された戴徳によるもの「大戴（だいたい）礼記」、戴聖によるもの「小戴（しょうたい）礼記」が基準となり、後漢に及び小戴礼記（小戴礼）が礼記と称され、大戴礼記（大戴礼）と区別されるようになった。戴徳と戴聖は梁（河南省）の人、后倉に学んで礼の大家となり、宣帝の時代に礼博士となり、編纂をしたものである。当時の大戴礼は八十五篇（残存するのは四十篇）、礼記（小戴礼）は四十九篇とされる。

後漢になると、鄭玄や高誘等が戴聖の礼記を尊重し、これに施した注解が流布し、小戴礼記が礼記となった。魏の時代には、王肅が鄭玄に敵対し、礼記を注し、王鄭二派に分かれたが、唐の時代、太宗皇帝の時に、五経正義が制定され、鄭注の礼記が用いられた。梁の皇侃の疏を受け継ぐ孔穎等の疏も主流となり、王肅の注解書は顧みられなくなり、散逸したという。

宋代になると、古典復古のもと、王安石等が「周礼」を尊び、礼記を軽んじる風潮が起こるとともに、仏教の流行のなか、程子や朱子等は礼記中の「大学」「中庸」を重要視するものの、他篇、礼記全般への関心は薄れた。清朝になって、再び科挙試験に採用されることになるが。

わが国においては、継体天皇の世（西紀六世紀前半）に百濟から伝来し、平安時代には、鄭注孔疏の正義本礼記が読まれた。しかしながら、科挙制度や、礼に基づく生活習慣の俗を持たないわが国においては、社会制度、礼の実践とかかわる具体的研究より、知的研究にとどまった。

禮運第九は、鄭玄の注によれば、「五帝三王の相變易したこと及び陰陽転旋の道を記したもの」と云う。人を、禽獸と異なり、人となし、社会生活を営むことを可能にするもの、それを営々と築いてきた先王、先人の営みが禮という。天・地・人が如何にあれば、善く生きてゆくことができ、如何にあれば、乱れてしまうのか。孔子の言葉として語られるが、戦国時代、漢初の編者の解釈が移入され、どこまでが、孔子の言葉か、もはや知るすべはない。孔子の先人達の思いも継承されており、古代中国の伝統の集積として耳を傾けることにしたい。

竹内氏の訓読と通釈を道標として読み進めることが出来た。字釈については白川静氏の字統によるところが多く、筆者の独断で字訓を変えているところがある。通釈については、原文を多く用いたため、竹内氏の釈より読みづらくなっている。ひっかかったところは、「盲、蛇に怖じず」、思い違いを恐れず釈し直した。鞭撻いただければ幸いである。

昔者仲尼與於蜡賓事畢出遊於觀之上喟然而仲尼之嘆蓋嘆魯也言偃在側曰君子何嘆孔子曰大道之行也與三代之英丘未之逮也而有志焉大道之行也天下爲公選賢與能講信脩睦故人不獨親其親不獨子其子使老有所終壯有所用幼有所長矜寡孤獨廢疾者皆有所養男有分女有歸貨惡其棄於地也不必藏於己力惡其不出於身也不必爲己是故謀閉而不興盜竊亂賊而不作故外戶而不閉是謂大同

昔者（むかし）仲尼、蜡賓（とひん）に與（あづか）り、事（こと）畢（おは）りて、出でて觀の上に遊び、喟然として嘆く。仲尼の嘆ずるは、蓋（けだ）し魯を嘆ず。言偃（げんえん：子游）側（かたはら）に在りて曰（いは）く、「君子、何ぞ嘆ず。」孔子の曰（のたま）はく、「大道の行なり。三代の英に與（くみ）し、丘、未だ之に逮（およ）ばざるも、志有らむ。大道の行なり。天下を公と爲し、賢を選び能と與（くみ）し、信を講（はか）り睦（ぼく）を脩（をさ）む。故に人、獨（ひと）り其の親を親とせず。獨り其の子を子とせず。老をして終る所有らしめ、壯をして用ふる所有らしめ、幼をして長ずる所有らしむ。矜寡（くわんくわ）孤獨（こどく）廢疾（はいしつ）者をして皆、養ふ所有らしむ。男、分有り。女、歸（き）有り。貨（くわ）、其の地に棄（す）つるを惡（にく）む。必ずしも己に藏（をさ）めず。力、其の身に出さざるを惡む。必ずしも己に爲せず。是の故に、謀（はかりごと）は閉じて興（おこ）らず。盜竊（とうせつ）亂賊（らんぞく）而（しか）して作（おこ）らず。故に外戸（がいこ）而（しか）して閉じず。是を大同と謂ふ。

昔し、仲尼（孔子）が蜡祭に賓として列席し、祭事が畢り、祭場から出て、樓觀に上って遊ばれたとき、ため息をつかれた。孔子が嘆ぜられたのは、生まれ育った魯の国の禮のことであった。側にいた言偃（子游）が、「君子、何を嘆じておいでですか。」と問ふと、孔子は、「大道の行（堯・舜のみち）、三代（夏・殷・周）の英明なる治世に與（くみ）す。丘（私）は、未だ及ばないのであるが、そう志している。やはり、大道の行だ。天下は、すべての者に公平に開かれ、政治において賢人を選び、能力ある者に参画させ、信により人々を結びつけ、互いに睦み合ふことを修養させる。人は、一人として、自分の親のみを親、自分の子のみを子としない。（公がすべての者の親、公にとってすべての者がわが子。）老人にはその生涯を終える所、壯年者には仕事をさせる所、幼年者には育つ所があり、矜（妻を亡くした男）、寡（夫を亡くした婦人）、孤（父母を亡くした子）、獨（子の無き老人）、廢（不具者）、疾（病人）、これら皆を養ふ。男には仕事に応じて身分を与へ、女には嫁ぐところを与へる。貨（有用の財）は、その地に棄て置かれることを嫌い、役立てられることを望むとはいえ、己が為のみに藏すことはない。力は、發揮されぬことを嫌ふ、とはいえ己の為のみにすることはない。だから、他人に謀をめぐらすことはなく、国を盗むこと、物をひそかにぬすむこと、秩序が乱れること、約束事を破ることは起こらない。故に、外の戸を閉めることもない。これを大同、すべてが皆同じく扱はれる、と謂ふ。

■ 仲尼は字（あざな）、孔子、名は丘。■ 蜡は、十二月に万物の神を合祭して感謝し、かつ明年の福を祈る、臘祭（ろうさい）ともいう。循環暦に、臘祭「夏には嘉平と曰ひ、殷には清祀と曰ひ、周には大錯と曰ひ、秦には初て臘と曰ふ、皆祭の名也、主る者の各（おのおの）其れを行ふ盛日を以て祖と為し、終の日を以て臘と為す。乃ち今に至る臘は辰日を以て臘日取る。夫れ季冬は水の終る時なり。辰日は土の位なり。乃ち水土を以て本と為る故に大寒に近き辰日を臘として獸を取りて先祖を祭り、鬼神に報すなり、是の故に季冬を臘月と曰ひ、大寒に近き辰日を臘日と云ふ。」とある。■ 與（あづかる）は、参加すること。與（くみ）すは、賛成、味方する。■ 喟然 ため息を漏らして。■ 大道の行 堯や舜の行（みち、おこない）。■ 三代 夏、殷、周のこと。■ 丘 本名であり謙った言い方。■ 逮 及ぶこと。■ 孔子家語では志でなく記とあり、この場合、未だ及ばないが、記録はある、となる。■ 公とは儀礼の行われる神聖な「齋庭：ゆにわ」の長、そこに祭祀される人が原義である（字統）。公は誰に対しても公平であることが求められた。■ 講は、両者を結合し和解させること、はかる、おしえる、と訓じる。■ 分は分限、身分の別、仕事における役割の別。■ 歸は、女の嫁すること、子をなすことを含もう。■ 盜とは元来共同社会秩序を拒否してその変革を要求する政治亡命者集団、つまり国を盗むこと。竊は元来穴倉に蔵しておいたものが虫に食われて知らぬ間に無くなること、ひそかにぬすむこと。亂は糸がもつれるさま、秩序が乱れること、賊は盟約を破棄する、約束事を破ること（字統）

今大道既隱天下爲家各親其親各子其子貨力爲己大人世及以爲禮城郭溝池以爲固禮義以爲紀以正君臣以篤父子以睦兄弟以和夫婦以設制度以立田里以賢勇知以功爲己故謀用是作而兵由此起禹湯文武成王周公由此其選也此六君子者未有不謹於禮者也以著其義以考其信著有過刑仁講讓示民有常如有不由此者在執者去衆以爲殃是謂小康

今、大道既に隠れ、天下を家と爲す。各（おのおの）其の親を親とし、各（おのおの）其の子を子とす。貨力は己の爲（ため）にす。大人（たいじん）、世及（せいきふ）して以（も）て禮と爲（な）す。城郭（じやうかく）溝池（こうち）以て固（かため）と爲し、禮義以て紀と爲し、以て君臣を正し、以て父子を篤（あつ）くし、以て兄弟（けいてい）を睦（むつまじ）くし、以て夫婦を和（やわら）げ、以て制度を設（まう）け、以て田里を立て、以て勇知を賢（たつと）び、以て功を己の爲（ため）にす。故に謀（はかりごと）、是を用ゐて作（おこ）りて、兵、此に由りて起る。禹、湯、文・武・成王、周公、此に由りて其れ選（す）ぐれたり。此の六君子は、未だ禮に謹（つつ）しまざる者有らざるなり。以て其の義を著（あら）はし、以て其の信を考（な）し、有過（いうくわ）を著（あきら）かにし、仁に刑（の）つり讓を講じ、民に常有るを示す。如し此に由らざる者有れば、執（いきほひ）在る者は去（す）て、衆、以て殃（わざはひ）と爲す。是を小康と謂ふ。」

今や、大道は既に隠れ、天下を（公とせず、）家と爲す。（相統ともなれば、）己の親以外

を親とすること、己の子以外を子とすることはない。貨力というものは、己が家、あるいは己の爲に用ゐるべきものとなり、大人、王たる者、世襲して、それを禮と爲している。城や郭、溝や池を廻らせてその邑を固める。禮と義を紀とし、政（まつりごと）における君臣関係を正し、家庭における父子関係を篤い心で慎ませ、兄弟関係を睦（むつ）ませ、夫婦関係を和（なご）ませ、制度により秩序を設け、田里により租税を立て、勇気があり知恵ある人を賢び、己の功績を挙げようとする。そこで、得失を謀り、それを手にするために兵を生み出した。夏の禹王、殷の湯王、周の文王、武王、成王、周公は、これにより他に抜きん出た。この六君子は禮を謹しみて行ひ、禮の義（意味）を明らかにし、禮の信を成就した。過ちのあることを明らかにし、仁にのっとり、讓（ゆず）ることで和解することを教へ、民に常なるもの、不変なことが有ることを示した。もしこれによらない者がおれば、勢いある者も、衆の支持を失ひ、挙句死に至ることになる。三代の英、これを小康と謂ふ。」と申された。

■ 今というのは何時か？孔子の言葉の続きであり、孔子の生きた時代、いわゆる春秋末期、戦国時代初頭である。■ 隱とは元來神隱しを言ひ、憂え哀しむ意が含まれる。隠れているだけで、消滅したのではなく、復旧可能と暗示されている。■ 家と爲すとは、相続が意識されている。それも己のためという下克上の時代の現実も反映されている。■ 大人とは小人の反、王たる人。世及とは世々相及、世襲のこと。■ 紀（き）とは筋道をたてること、則（のり）とすること。■ 篤とは馬が困弊（こんへい）することが原義、篤厚の意に古くから用ゐられた。困弊を篤い心で慎むこと（字統）。■ 睦は同族の人に対する親和の情。■ 和は軍門で盟誓して和議を行うことが原義（字統）、折り合いをつけ和を結ぶこと。■ 制は切り揃え秩序をなすこと。度は計って度数を定め基準を作ること。■ 田の収穫と里の人口を捕捉する。■ 勇気があり知恵のある人を賢人として尊ぶ。■ 謀とは神意に謀ってのち、はじめて行うことが原義（字統）、ここでは紀に基づいて得失を謀ること。兵とは斤（おの）を両手で差し上げている象形、兵器、兵士であるが、制度、田里が整備され兵が組織されたことを意味しよう。■ 選は神前に揃って舞う象形（字統）、えらぶ、すぐれる、の義。■ 著は、そこにある意図を明らかにすること。■ 考は考校で、しらべる、考成で、なる。■ 有過は過ちのあること。■ 刑は、のつとる、手本にすること。■ 讓は、相責め讓（せ）むるなり、と責めるのが原義で、退く、避けるから讓（ゆず）る義に用いる（字統）。■ 有常は不変なことを言ふ。著有過刑仁講讓示民有常は、人を責める、刑罰を与える場合にはその過ちを明らかにしなくてはならないこと、仁にのっとり、互いに譲り合い和解すること、そこに不変の則があることを示すものとなっている。■ 執は、勢いのこと、故郷を棄てることを大去といふ。■ 殃とは神罰下って死に至ること、首枷を加えられ死に至ることでもある（字統）。■ 堯・舜の世を「大同」、三代（夏、殷、周）の世を「大同」には及ばないが「小康」とした。

言偃復問曰如此乎禮之急也孔子曰夫禮先王以承天之道以治人之情故失之者死得之者

生詩曰相鼠有體人而無禮人而無禮胡不遄死是故夫禮必本於天殺於地列於鬼神達於喪祭射御冠昏朝聘故聖人以禮示之故天下國家可得而正也言偃復問曰夫子之極言禮也可得而聞與孔子曰我欲觀夏道是故之杞而不足徵也吾得夏時焉我欲觀殷道是故之宋而不足徵也吾得坤乾焉坤乾之義夏時之等吾以是觀之

言偃、復た問ひて曰く、「此(かく)の如きか、禮の急なる。」孔子の曰はく、「夫れ禮、先王、以て天の道を承(う)け、以て人の情を治める。故に之を失ふ者は死し、之を得る者は生く。詩に曰く、『鼠を相(み)るに體(たい)有り。人にして禮(れい)無からむや。人にして禮無くば、胡(なん)ぞ遄(すみやか)に死せざる。』是の故に、夫(か)の禮は必ず天に本(もと)づき、地に殺(なら)ふ。鬼神を列し、喪祭(さうさい)、射御(しやぎょ)、冠昏(くわんこん)、朝聘(てうへい)に達す。故に聖人、禮を以て之に示す。故に天下國家得て正しくすべきなり。」言偃、復た問ひて曰く、「夫子の禮を極言するは、得て聞くべきか。」孔子の曰はく、「我夏の道を觀(み)んと欲す、是の故に、杞に之(ゆ)けり。而して徴するに足らざるなり。吾夏時を得たり。我殷の道を觀んと欲す、是の故に、宋に之(ゆ)けり。而して徴するに足らざるなり。吾、坤乾(こんけん)を得たり。坤乾の義、夏時の等、吾是を以て之を觀る。

言偃(子游)がまた、「といふことは、禮が要(かなめ)なのですね。」と問ふと、孔子は、「かの禮、それは、先王が天の道を継承し、それにより人の情を治めるものである。故に、これを失へば死に、これを得れば生きる。詩に曰ふ、『鼠にも人と同じく身体がある。人と生まれて禮が無い(身体だけが有る、鼠なみだな。)人として禮が無いとするなら、どうして遄(すみやか)に死なぬことがあるか、(いやすでに死んだも同然。)]』だから、かの禮とは、必ず天にその本があり、地に倣(なら)ふ。鬼神をこの世と分け、牲で清めて祭り、死者を哀哭して喪し、祖先や祖神、山川の神に犠牲を供えて祭り、弓矢を射、馬車を御し、成人に冠し、目合はわせて昏し、朝日を迎え、政務を行ひ、人を聘すは、禮により達することができる。故に聖人は、禮によりその方法を示し、故に天下國家を正すことができる。」と申された。言偃がまた、「先生の禮を極めたお言葉をお聞かせいただけるなら、是非お聞かせください。」と続けた。孔子は、こう申された。「私は、夏の道を觀ようと思ひ、夏の遣民の国、杞を訪れたが、それを裏付けるものは十分ではなかった。しかし、夏の曆を得た。殷の道を觀ようと思ひ、殷の遣民の国、宋を訪れたが、それを裏付けるものは十分ではなかった。しかし、坤乾を得た。地と天における万象の轉變を記した坤乾之義と夏の曆、これ等により殷と夏の禮を觀ることはできた。

■ 急とは急要、急所のこと。■ 詩、鄘風(ようふう)、[鼠相\(しょうそ\)三章](#)のひとつ。地主を怨む句とされる。■ 相は視ることが本義。■ 遄は、速に同じ。■ 殺は砕いて混ぜることが原義、ここでは倣うこと。■ 列は、頭部を載(き)る形で、断首して列するが原義。列に

は割裂と陳列の意があり、牲を埋めて悪邪をさえぎる義をもつ（字統）。■ 極言とは言を極めること。■ 徹は、証拠として裏付けること。■ 坤は、易の卦で三陰、地のこと、乾は三陽、天のこと。■ 小康の世は禮により治められる、その禮は「坤乾」の義と「夏曆」から推測できるが、禮の起源は更に古く、以下にそれに言及される。

夫禮之初始諸飲食其燔黍捭豚汙尊而抔飲蕢桴而土鼓猶若可以致其敬於鬼神及其死也升屋而號告曰皋某復然後飯腥而苴孰故天望而地藏也體魄則降知氣在上故死者北首生者南鄉皆從其初

夫れ禮の初（はじめ）、諸（これ）、飲食に始（はじ）む。其れ燔黍（はんしよ）捭豚（へいとん）汙尊（あそん）し而（しか）して抔飲（ほういん）し、蕢桴（くわいふ）して土鼓（どこ）し、猶ほ若（かくのごとく）して以て其の敬を鬼神に致す可（べ）く、其の死に及びてや屋（をく）に升（のぼ）りて號（さけ）び告（つ）げて曰く、皋（ああ）某（ぼう）復（かへ）れ。然る後に、腥（せい）を飯（はん）し而して孰（じゅく）を苴（つつ）む。故に、天、望（ぼう）して、地、藏（ぞう）すなり。體魄（たいはく）は則ち降（くだ）り、知氣は上に在り。故に、死者は北首（ほくしゅ）し、生者は南郷（なんきやう）し、皆、其の初に従ふ。

禮の初といふものは、これ、飲食に始まる。燔（や）いた牲肉、黍（きび）の醸酒、七体に割いた豚、酒甕に溜めたにごり酒を供へ、手ですくって飲み、土を運び木組をして設けた壇の土を敲（たた）き固めて歌う。かようなことでも、鬼神に敬（つつ）しんで仕へることになる。人が死ぬに及びては、殯をする板屋の屋根に上り、皋 gāo 某 mǒu 復 fù、（某のところに死んだ人の名をいれて叫ぶ、皋は高 gāo に通じる）、高きところへゆかんとする某よ帰って来い！然る後に、飯玉し、生肉、包んだ魚、煮た肉を供へた。故に、天を望んで祭祀し、地に葬り匿す。體は地氣、魄は陰氣であり重く降る。知氣は靈魂、魂は陽氣、云は雲、鬼は死者の靈、軽く上に在る。靈魄は下に、靈魂は上に。故に、死者は幽（陰）に向かうべく北首、北枕とする。生者は南（陽）を向いて饗飲、饗食する。皆こうして初まったことに従ふ。

■ 初には継承して故事とする意味が含まれる。■ 黍（きび）を燔（や）くと注されているが、これでは字義が通らない。黍を火で焼いて何とするのか？燔は牲肉を燔くこと。黍は粘り気があり醸酒に適するとされ、醸酒のことであろう。ともに祭るために供える。■ 捭は開くこと、豚は七体に分けて供するとあり、捭豚はつつしんで豚を割き分けること。■ 汙尊は、地に窪みを掘り溜めた水と注されているが、汙は汚であり、にごっている水溜り、尊は酒の入容器を手にして捧げることが原義。汙尊はにごり酒を溜めた甕を供へることではないか。■ 抔飲とは、器を使はず手ですくって飲むこと。■ 蕢桴而土鼓は、茅（かや）の硬い茎をバチにして土の鼓を叩くと注されている。桴鼓で鼓を打つとなり、バチの義にも用ゐられるが、蕢（あじか）は草の茎を編んで作るかご、背中に負うて土を運ぶとされる。桴は筏（いかだ）であるが、高所にわたす

棟木でもある、祭壇を築くと解した。■ 鬼は祖先の霊、神は祖神、山川の神。■ 屋は板屋、殯をする所。■ 號も告も事が成就するように神に訴えること。■ 復は、たまよばい、の禮と訓じられる。禮記、檀弓下に、「愛を尽くす道、禱祠（とうし）の心有り、これ幽に反すを望み、これ鬼神の道を求めるなり。」とある。■ 飯腥而苴孰は、遺体を始末して、生米を口に含ませ、煮た肉を包み靈に供える、と注されている。死者の口中に含ませる玉を飯玉といふ、腥は生肉のこと、元来は豚が想定されている。苴、魚を草に包んで贈るものを苞苴（ほうしよ）といひ、つつむこと。孰は器で羊を煮て捧げることが原義、醇熟したものをいふ。■ 書経、舜典に「山川に望す」とあり、周禮、大司樂に「以て四望を祀る」とは山川の祭祀、天望とは天を祭祀すること。禮記、檀弓上に「葬なるものは藏なり、藏なるものは人の見るを得ざるを欲すなり」とあり匿（かく）すこと。地藏とは、葬り匿すところ。■ 體は、からだ、魄は、精気を失って白骨化したもの、白は頭骸骨のこと、淮南子、主術訓に、「地氣を魄と為す」とある（字統）。■ 郷は饗飲、饗食すること、饗飲酒禮は村落の重要儀礼となる。

昔者先王未有宮室冬則居營窟夏則居橧巢未有火化食草木之實鳥獸之肉飲其血茹其毛
未有麻絲衣其羽皮後聖有作然後脩火之利范金合土以爲臺榭宮室牖戶以炮以燔以亨以
炙以爲醴酪治其麻絲以爲布帛以養生送死以事鬼神上帝皆從其朔

昔者（むかし）先王（せんわう）未だ宮室（きゅうしつ）有らず、冬は則ち營窟（えいくつ）に居（を）り、夏は則ち橧巢（そうさう）に居る。未だ火化（くわくわ）有らず、草木の實、鳥獸の肉を食し、其の血を飲み、其の毛を茹（く）ふ。未だ麻絲（まい）有らず其の羽皮（うひ）を衣（き）る。後に聖作（おこ）る有りて、然る後に火の利を脩む。金を范（はん）し土を合（あは）せ以て臺榭（たいしゃ）、宮室、牖戶（いうこ）を爲（つく）り、以て炮（ほう）し以て燔（はん）し以て亨（ほう）し以て炙（せき）し以て醴酪（れいらく）を爲る。其の麻絲（まし）を治め以て布帛（ふはく）を爲る。以て生を養ひ、死を送り、以て鬼神、上帝に事（つこう）まつり、皆其の朔（はじめ）に従ふ。

昔し、先王、宮室を持たぬ時には、冬は、洞穴に住み、夏は、木の上に木を集めて巢を作り住んだ。まだ火を用ゐて煮炊きすることを知らず、生のまま草木の實、鳥獸の肉を食（くら）ひ、その血を飲み、その毛を貪り食ふた。まだ、麻（あさ）や絲（きぬ）も無く、羽や皮を衣（き）ていた。後に聖人が現はれて、火の利を脩めた。金属で型をつくり、土を合はせ、靈を降ろす高台、射儀場、宮室、木柱の窓、片開きの戸を作り、禽獸をまるやきにし、牲肉を燔（や）き、ものを烹（に）たり、火であぶり、醴酒や酪製品を作った。麻や絲を紡ぎ、祭祀用の布や帛（しろぎぬ）を織った。そのようにして生を養ひ、死を送ることができるようになり、鬼神、上帝を祭り仕へ、皆そのはじめに従うた。

■ 室は矢を放って地をトし矢の落ちた所、至、を祓いハを加えた形、宗廟の祖霊を祭るところ、宮は室が相連なった形、後に居室の意となる（字統）。■ 營は宮室を造営することであるが、營窟は洞穴に居をつくり住むこと。■ 檜は木を積み上げてこしらえた住居、木の上にあるのが巢、檜巢は木の上に木を集めて居を作り住むこと。新故異備に、「上古の時代、人々は少なく禽獣が多かったので、人々は禽獣や爬虫類に勝てなかった。聖人がいて、樹上に住まいを掛けることを教えた。これによって獣の群れから害されることを避けられた。民はこれを悦び、王として天下を治めさせた。号して有巢氏という。」とある。■ 火化は火で焼、炮、燔、炙、焙、煮、炊、焚、蒸、燻等々。■ 茹は菜食、野菜を煮て食うことをいふが、ここではそのまま蛮人のごとく食う義。韓非子、五蠹篇「三皇」に、「燧人始鑽木取火（棒をこすって火をつける）、炮生為熟（生ものを焼き煮る）、令人無復腹疾（腹痛を繰り返さない）、有異於禽獸、遂天之意、故曰遂人也（禽獣と異なり、天の意を継ぎ、遂人氏と曰ふ）」とある。■ 麻（あさ）は麻皮から作られ、織った布を絺綌（ちげき）といい神事の修祓に用いられる。絲（きぬ）は生糸、蚕の吐く所なりとされ、絹糸を織った布は絲衣（しい：祭服）に用いられる。■ 聖とは聖人、有作とは出現すること。史記、三皇五帝に、「庖羲は燧人氏に代わり天を継いで王となった。燧人氏は木をこすって火をおこし、火を用ゐることを人間にもたらした。庖羲は、犠牲を養い庖厨（料理）して天を祀ったのであるから、火を料理と祭祀に用ゐたことになる。」とある。■ 范は土器の型であるが後鑄型に用ゐられた、合は集めて一つにする。■ 臺は霊を降ろす高台、廟所の原形、榭は射儀を行う所、後には楽器を蔵する所。■ 牖は土壁の墉（よう）にもうけた木枠の窓、戸は片開きの戸（両開きは門）。■ 炮は毛のまま肉を炙（あぶ）る、まるやきのこと。燔は獣の掌の肉、牲肉を燔（や）くこと、亨は物を献じてもてなすことであるが、烹飪（ほうじん）の器の形ともされ、烹（に）る義ともされる。炙は肉を火であぶること。■ 醴は酒一宿にして熟するもの（説文）、あまぎけの類。酪は乳を煮つめて飲料やチーズにしたもの。■ 治（おさめる、まつりごと、ととのう）は水を治める儀礼が原義。■ 上帝は天の帝、事は祭り仕へること。■ 朔とは月のはじめ（一日：ついたち）のことから原初を意味する。

故玄酒在室醴醑在戸棗醢在堂澄酒在下陳其犧牲備其鼎俎列其琴瑟管磬鐘鼓脩其祝嘏以降上神與其先祖以正君臣以篤父子以睦兄弟以齊上下夫婦有所是謂承天之祐

故に、玄酒（げんしゅ）は室に在り、醴醑（れいさん）は戸に在り、棗醢（さいてい）は堂に在り、澄酒（ちょうしゅ）は下に在り、其の犠牲を陳（つら）ね、其の鼎俎（ていそ）を備（そな）へ、其の琴瑟（きんしつ）管磬（くわんけい）鐘鼓（しょうこ）を列し、其の祝嘏（しゅくか）を脩め、以て上神（じょうしん）と其の先祖とを降（くだ）し、以て君臣を正し、以て父子を篤（あつ）くし、以て兄弟（けいてい）を睦（むつま）じくし、以て上下を齊（ととの）へ、夫婦所（ところ）有り。是を天の祐（さいはひ）を承（う）くと謂ふ。

故に、玄酒（水）は祭祀を行う室に置き、醴酒、醑酒は室の戸に置き、堂上には棗醢、

堂下には澄酒を置き、犠牲を陳ね、鼎俎にお供えを盛り、琴瑟、管磬、鐘鼓の楽人を列し、祝詞を脩め、上神と其の先祖の靈を降す。天上の神と祖先の靈を招来するために、祝嘏を奏して降ろし、水、酒、肉や鼎俎に盛られた料理、音楽でもてなす。神と祖先と人の和合、それが君臣を正し、父子を篤くし、兄弟を睦じくし、上下の関係を秩序あるものにし、夫婦の役割分担をもたらす。是を天の祐（福）を受け継ぐと謂ふ。

■ 玄酒は水のこと。醴は上にみた。醢は濁り酒を少し澄ましたもの。■ 粢はきび、いねもちの類、醢は醴の精なるもの、粢醢は濁り度が薄い酒のこと。澄酒は清酒。■ 鼎は三足両耳、五味（酸、苦、甘、辛、鹹）を和するの寶器、俎は牲をのせる台。■ 嘏は吉祥の語、祝（はふり）、尸（かたしろ）の為に福を主人に致すの辞。■ 齊上下は、上下の関係を秩序つけること。所は、この場合、立場、役割、夫婦の分担があきらかにされること。■ 詩、小雅、信南山に、「天の祐を受く」とみえ、爾雅、釈古に、「福なり」と注している（字統）

作其祝號玄酒以祭薦其血毛腥其俎孰其殺與其越席疏布以幕衣其澣帛醴醢以獻薦其燔炙君與夫人交獻以嘉魂魄是謂合莫然後退而合亨體其犬豕牛羊實其簠簋籩豆鉶羹祝以孝告嘏以慈告是謂大祥此禮之大成也

其の祝號（しゅくがう）を作り、玄酒以て祭り、其の血毛（けつもう）を薦（すす）め、其の俎（そ）を腥（せい）にし、其の殺（かう）を孰（じゅく）にし、其の越席（くわつせき）に與（あ）つかり、疏布（そふ）以て幕（べき）し、其の澣帛（かんぱく）を衣（き）、醴醢（れいさん）以て獻じ、其の燔炙（はんせき）を薦め、君と夫人と交（こもごも）獻じ以て魂魄（こんぱく）を嘉（たの）します。是を合莫（がふばく）と謂ふ。然る後に退（しりぞ）きて合亨（がふほう）し、其の犬豕（けんし）牛羊（ぎうやう）を體（たい）し、其の簠簋（ほき）籩豆（へんとう）鉶羹（けいかう）を實（み）たし、祝（しゅく）、孝を以て告げ、嘏（か）、慈（じ）を以て告ぐ。是を大祥（たいしやう）と謂ふ。此れ禮の大成（たいせい）なり。

（先祖を「皇祖」、牲牛を「一元大武」、稷を「明菜」と）祝號を作り、玄酒で清めて祭り、（太古の俗、まず、）血と毛を薦（すす）め、俎に生肉を盛り、骨付き肉を煮て、草を編んで作った敷物に君主と夫人が参坐し、目のあらい麻布を周囲に下垂して幕となし、よく澣（あら）った清浄な帛を衣て、戸に在る醴醢を獻じ、陳（つら）ねた燔炙した肉を薦める。君主と夫人が交互に獻じて魂魄を嘉（たの）します。これを、幽冥に神、祖靈、人が合する合莫（がふばく）と謂ふ。然る後に君主と夫人は退き、生肉を合はせて煮込み、犬豕牛羊の骨肉すべてを供し、簠簋、籩豆、鉶羹を充たし、祝人は孝子・・・、孝孫・・・と孝を用ゐて祖靈に奏上し、祖靈への嘏詞には慈を用ゐて主人に告ぐ。これを大祥と謂ふ。これが禮の大成である。」

■ 作其祝號とは、先祖を「皇祖」とか牲牛を「一元大武」とか稷を「明菜」とか美称をつけること。一物一名とは限らないので、どうするかを取り決めること、と注される。■ 玄酒以祭とは、水で清めることか？我々が参拝する場合、手や口をすすぐごときこと。■ 腥其俎とは、俎(板台)に腥、生肉を盛ること。■ 孰其殽とは、殽、骨付き肉を煮ること。■ 與其越席とは草を編んで作った敷物の席(当時は椅子がなく、席とは敷物であった)に君と夫人が共に参坐することか。■ 疏布以冪 儀礼、既夕礼に、「冪に疏布を用ふ」の注に「覆うなり」とあり、器を覆うこと、疏布は目のあらい麻布、酒樽を覆うと注されているが、冪は、冪と幕であれば周囲に下垂した幕をかけることではないか？■ 澣帛は練り絹を色染にして織り上げたものと注されるが、澣は説文に、「衣垢を濯(あら)ふなり。」とあり、澣った清浄な帛を衣ることではないか？■ 莫は冥に通じる、幽冥に神、祖霊、人が合するを合莫と謂ふ。■ 合亨とは腥のままにおけない肉を合わせて煮ること。■ 體は、骨肉すべてを供すること。■ 簠は説文に、「黍稷の圓器なり、竹皿に従ひ甫聲」とする。簋は円形で肉用の器。籩は竹の豆、豆は足の高い食器(高杯)で肉用。簠簋豆(匚)は後青銅器で作られた。鉶は説文に、「器なり」とのみあり、玉篇に、「羹(あつもの：肉スープ)の器なり」とあり、周禮、亨人(ほうじん)の鄭司農注に、「大羹には五味(酸、苦、甘、辛、鹹)を加えず、鉶羹には塩菜を加える」という(字統)。これらは祭りの後に臣下に下賜される。■ 犠牲により清め、齋戒し、君と夫人が幽冥に神、祖霊と合する合莫、神人和合が「大成」となる。

孔子曰嗚呼哀哉我觀周道幽厲傷之吾舍魯何適矣魯之郊禘非禮也周公其衰矣杞之郊也禹也宋之郊也契也是天子之事守也故天子祭天地諸侯祭社稷

孔子の曰(のたま)はく、嗚呼(ああ) 哀(かな) しいかな。我、周道を觀(み)るに、幽厲(いうれい) 之を傷(やぶ)る。吾、魯を舍(す)て何(いづ)くにか適(ゆ)かむ。魯の郊禘(こうてい) 禮に非ざるなり。周公、其れ衰へたる。杞(き)の郊なるは禹なり。宋の郊なるは契なり。是れ天子の事守(じしゅ)なり。故に、天子は天地を祭り、諸侯は社稷(しゃしよく)を祭る、と。

孔子の曰はく、「嗚呼、哀しいかな。我、文王、武王、周公の道、周道を觀るに、幽王、厲王の時代に至り、損はれている。魯を舍(す)て、どこに適(ゆ)けばいいのか？魯が郊、禘を祭るは、周公の政(まつりごと)ありてのこと、諸侯である魯侯の禮に非ざる。周公の政は、魯ではすでに衰へたり。杞の国で郊を祭るは、禹(天命を得た夏の始祖)の政ありてのこと、宋の国で郊を祭るは、契(天命を得た殷の始祖)の政ありてのこと。(しかし、もはや衰へたる。)郊祭は、天子が事(つか)へ守(まも)るべきもの。故に、天子は天地を祭り、諸侯は社稷(地神穀神)を祭るべきものである。

■ 嗚呼 wū hū 哀哉 āi zāi すべて一声(平声)の嘆息。■ 郊は天子が郊(外)に出て天を祀るこ

と、禘は上帝を祀ることが原義、嫡子にあたる地上の帝がこれを行ふが、後には祖先を合祀する大祭となる。魯で郊禘が行はれたのは、武王亡き後、成王を補佐し周道を軌道にのせた周公、天子に準じるものとして特に認められたものであり、魯侯として行ふことができるものではない。その周公の政が衰へ、形のみ郊禘が行はれるようになった。■ 孔子が嘆じるのは、諸侯である魯侯が周公の政を継承せずして、郊禘を行ふこと、それに参列させられること、冒頭の嘆息に戻った。

祝嘏莫敢易其常古是謂大嘏祝嘏辭説藏於宗祝巫史非禮也是謂幽國醜罍及尸君非禮也是謂僭君冕弁兵革藏於私家非禮也是謂脅君大夫具官祭器不假聲樂皆具非禮也是謂亂國

祝嘏(しゅくか) 敢(あへ) て其の常古(じやうこ) を易(か) ふること莫(な) し。是を大嘏と謂ふ。祝嘏の辭説(じせつ)、宗祝巫史(そうしゅくふし) に藏すは禮に非ざるなり。是を幽國と謂ふ。醜罍(さんか)、尸君(しくん) に及ぶは禮に非ざるなり。是を僭君(せんくん) と謂ふ。冕弁(べんべん) 兵革(へいかく) を私家に藏すは禮に非らざるなり。是を脅君(けふくん) と謂ふ。大夫、官を具(そな) へ、祭器を假(か) らず、聲樂皆具ふるは禮に非ざるなり。是を亂國(らんごく) と謂ふ。

祭祀における祝の辭、嘏の辭、これらの詞(ことば)は常古、昔からのものを敢へて易へることはない。これを大(おほき)なる嘏(福)と謂ふ。祝嘏の辭説を宗、祝、巫、史、それぞれにおいて藏すは、禮に非ざる。(それぞれにおいて藏し、内容を改変するなら、)これを幽國と謂ふ。先代の君主の尸(かたしろ)に、夏の酒盃である醜や殷の酒盃である罍を献じることが、筋違ひであり、禮に非ざる。これを僭君と謂ふ。君主が着用する冕や弁、武器や甲冑を私家に藏すは、禮に非ざる。君主が藏すべきものを私家(家臣)が藏すことになれば、これ脅君、君主を脅かす、と謂ふ。大夫が犠牲を具(そな)へ、祭器を假(か)らず、聲樂を皆具ふるは、禮に非ざる。先祖の祭祀を行ふ主体は、諸侯であり、大夫が具ふべきものではない。君臣関係が亂れ、これを亂國と謂ふ。

■ 祝嘏は祭における祝の辭、嘏の辭。嘏とは説文に、「大なり、遠なり」とあり福を嘏ともいふ。吉祥の語をもって祝福などを奏するをいふ。易へないことが大(おほき)なる嘏(福)といふ。祝嘏はその祖先神を称え、謝し、祈るべきことを言葉にしたもので、それを聞き届けていただくべく奏上し、神意を降ろすことである。その内容を個人的見解で変えることを戒めたものであろう。しかし、宗廟の保管庫に藏する伝統は破られた。■ 幽國 幽に隠れる、暗いの義があり、神が隠れ、神に伝はらず、神意が降りず、思いなしが横行し、國が暗くなる。■ 醜は夏の酒盃、罍は殷の酒盃、周の酒盃は爵といふ。尸君とは先代の君主の尸(かたしろ、死者に代わって神位に坐すもの、尸が祭祀を司る)。醜罍及尸君とは、結果的に先代の君主に醜罍を献じること

と。夏を継ぐ杞が醜を用い、殷を継ぐ宋が罍を用いるのは良いが、そうでない諸侯が醜罍を用いるのは禮に非ず。周に封建されたのであり爵を用ふべし。■ 僭とは尊貴を侵し乱すこと。■ 弁は冕に匝（つ）ぐもの(冠髮)。周には弁、殷には𡗗（く）、夏には収とする。■ 兵革は武器と甲冑。■ 具官は、官職、官吏を備へるとされるが、ト辞に、「父戊（ふぼ：祖王の名）に出伐（い）うばつ：祭名）するに牛を官に用ゐんか」とあるごとく、犠牲を備えることではなかろうか。

故仕於公曰臣仕於家曰僕三年之喪與新有昏者期不使以衰裳入朝與家僕雜居齊齒非禮也是謂君與臣同國故天子有田以處其子孫諸侯有國以處其子孫大夫有采以處其子孫是謂制度故天子適諸侯必舍其祖廟而不以禮籍入是謂天子壞法亂紀諸侯非問疾弔喪而入諸臣之家是謂君臣爲讎。

故に、公に仕（つか）ふるを臣と曰ひ、家に仕ふるを僕と曰ふ。三年の喪と新たに昏（こ）有る者は期（き）に使はず。衰裳（さいしょう）を以て朝（てう）に入り、家僕と雜居（ざつきょ）し、齒（し）を齊（ひと）しくするは、禮に非ざるなり。是れを君と臣、國を同じくすると謂ふ。故に天子田（でん）を有（たも）ち、以て其の子孫を處（お）く。諸侯、國を有ち以て其の子孫を處く。大夫、采（さい）を有ち以て其の子孫を處く。是を制度と謂ふ。故に天子は諸侯に適（ゆ）くに必ず其の祖廟に舍（やど）る、而して禮籍（れいせき）を以てせずして入る。是を天子、法を壞（やぶ）り、紀を亂す、と謂ふ。諸侯、疾（やまひ）を問ひ喪を弔（てう）するに非ずして諸臣の家に入る。是を君臣讎（たはむれ）を爲すと謂ふ。

故に、公（君公）に仕ふるを臣、家（家臣、大夫）に仕ふるを僕と曰ふ。三年の喪と新婚の者は、その期間（新婚は一年）使はない。新衰や齊衰の衣装のまま朝廷に出仕したり、家僕と雜居し、同年であるからと肩を並べるは、禮に非ざる。これを君と臣、國を同じくすると謂ふ。君祖を継ぐ君主と臣が同列になりようがなく、大夫と僕、主従が肩を並べようもない。故に天子は、租税を徴収するために分与する田を有（たも）ち、その子孫を安堵する。諸侯は封じられた國を有（たも）ち、其の子孫を安堵する。大夫は采邑を有（たも）ち、其の子孫を安堵する。これを制度と謂ふ。故に、天子が諸侯を訪ぬれば、必ず其の祖廟に宿るのであるが、祖廟における禮をよく聴かずして入るなら、これを天子が法を壞り、紀を亂す、と謂ふ。諸侯が臣の疾を見舞い、喪に弔すに非ずして諸臣の家に入る、これを君と臣、讎（たはむれ）を爲す、と謂ふ。（所用があれば、臣を召すのが筋であり、臣のもとに出向くは、まともではない。）

■ 衰裳とは新衰や齊衰の衣装、喪服のこと。■ 齒によって年齢を知ることができるので年齒といふ。齊齒は同列、肩を並べるとされる。■ 田を有つとは、土地を租税単位の田として分与

する権限を保つことであろう。■ 采は分つこと、ここでは采邑のこと。■ 禮籍せずして入る、祖廟における禮を記したものをよく確認することをせずして入ること。

是故禮者君之大柄也所以別嫌明微儻鬼神考制度別仁義所以治政安君也故政不正則君位危君位危則大臣倍小臣竊刑肅而俗敝則法無常法無常而禮無列禮無列則士不事也刑肅而俗敝則民弗歸也是謂疵國故政者君之所以藏身也是故夫政必本於天穀以降命命降于社之謂穀地降于祖廟之謂仁義降于山川之謂興作降於五祀之謂制度此聖人所以藏身之固也

是の故に、禮は君の大柄（たいへい）なり。嫌（けん）を別ち、微（び）を明らかにし、鬼神を儻（ひん）し、制度を考へ、仁義を別つ所以なり。政を治め君を安ず所以なり。故に、政（まつりごと）正しからざれば則（すなは）ち君位危（あやふ）く、君位危くば則ち大臣倍（そむ）き、小臣竊（ぬす）む。刑肅（きび）しくして俗敝（やぶ）るれば、則ち法、常（つね）無く、法、常無ければ、禮、列無し。禮、列無ければ、則ち士事（つこうまつ）らざるなり。刑肅しくして俗敝るれば、則ち民、歸さざるなり。是を疵國（しこく）と謂ふ。故に、政は君の身を藏（をさ）むる所以なり。是の故に、夫の政は必ず天に本づき、穀（なら）ひて以て命を降（おろ）す。命、社に降る、之を地に穀ふと謂ふ。祖廟に降る、之を仁義と謂ふ。山川に降りる、之を興作（こうさく）と謂ふ。五祀に降る、之を制度と謂ふ。此れ聖人、身を藏（をさ）むる所以の固（かため）なり。

この故に、禮は君主の大柄となる。禮は、まぎらわしいことを区別し、かすかな兆しを明らかにし、鬼神を迎え供し、制度を考へ、仁を尽くすべきところと義を尽くすべきところを別つものである。政を治め、君位を安んじる。故に、政が正しくなければ、君位は危く、君位が危くなれば、大臣は反（そむ）き、小臣は竊（ぬす）む。そこで君主は、刑を肅（きび）しくし、（上は不正を取り締まることに汲々とし、民はそれから逃れることに汲々とし、）風俗は疲弊し、（法の盲点をつき、すり抜ける者が現れ、）法を変へて対応すれば、法に常が無くなり、法に常が無くなると、禮に秩序が無くなる。禮に秩序が無くなると、士は仕へることをせず（、下克上の風があらはれる）。刑を肅（きび）しくし、風俗が疲弊すれば、民の歸すべきところ、拠り所とすべきものがなくなる。これを疵國（しこく）と謂ふ。故に、政治は（君主が自らのために行ふものではなく、）身を藏（をさ）めねばならぬものである。つまり、その政治は必ず天に本づき、天に交はり倣（なら）ひ、それにより、天が命を降ろすものでなくてはならない。命が社、地主、土地の神に降りるを、地に倣（なら）ふと謂ふ。（地に関することは、社の命ずるところによりて行ふ。）命が祖廟に降りるを、仁義と謂ふ。（人を人たらしめる仁義は、天より祖先に授けられたものにより行ふ。）山川に降る命、これを興作と謂ふ。（これに倣ふものが土地土地の歌舞音曲の風俗となる。）五祀に降りる命、これを制度と謂ふ。（これに倣ふものが土地土地の制度となる。）

このようにして、聖人は身を藏めることを固く護る。

■ 柄 古くは木を適当な長さに切って柄とした。指揮棒のごときもの。国語、齊語に、「國を治むるに、その柄を失わず」とある。韓非子、「二柄」とは賞罰の大権。■ 嫌は、嫌疑、まぎらわしいこと。微は、かすかな兆し。■ 倍は、割に通じ、刀で二つに分けることから反（そむ）く。竊は外から見て分からないうちに中身を虫が食い空虛になること。肅は肅正（嚴重に不正を正す）の肅、つつしむこと。敝は、衣が破れることが原義、疲弊の敝、やぶれ、こわれ、おとろえ、つかれること。■ 疵とはきずのあること、病んでいること。■ 政は君主が身を藏むる所以とは、政治は天に本づき天に倣ひ、命を受けて行はれるもので、君主が前面に出て行ふものではなく、その中に身を藏（をさ）めて行ふべきものである。■ 殺とは交わることであり、交わり倣うこと。禮記、樂記に、「上下の神を降興す、とあり、上帝には降、下神には興という。」とある。■ 興は、酒をふりそそいで、地靈を呼び興す儀礼。地靈を興す呪儀が呪詞的な表現を伴うとき、その呪詞を興（きょう）という。賦（ふ）はことだまによって対象にはたらきかけること、興はいわゆる興舞の呪儀により地靈を興すことば、作興といふ（字統）。詩や樂・舞に関することであろうか？王注に、「祖の雲雨を興造し万物を作生するを謂ふなり」とあり、この場合、雨乞いの義となる。■ 五祀は、戸・竈・中霤・門・行(道)の五神の祭。■ 固とは嚴重に護ることが原義。

故聖人參於天地竝於鬼神以治政也處其所存禮之序也玩其所樂民之治也故天生時而地生財人其父生而師教之四者君以正用之故君者立於無過之地也故君者所明也非明人者也君者所養也非養人者也君者所事也非事人者也故君明人則有過養人則不足事人則失位故百姓則君以自治也養君以自安也事君以自顯也故禮達而分定故人皆愛其死而患其生

故に、聖人は天地に參（さん）し、鬼神に竝（なら）び、以て政（まつりごと）を治む。其の存する所に處（を）るは、禮の序なり。其の楽しむ所を玩（もてあそ）ぶは、民の治（ち）なり。故に、天、時を生み、地、財を生み、人、其の父が生みて、師、これを教ふ。四つは、君、正を以てこれを用ふ。故に、君は、過ち無きの地に立つなり。故に、君は明（めい）す所なり、人を明す者に非ざるなり。君は、養（やしな）ふ所なり、人を養ふ者に非ざるなり。君、事（つこうまつ）る所なり、人を事る者に非ざるなり。故に、君、人を明すは則ち過ち有り。人を養ふは則ち足らず。人を事るは則ち位を失ふ。故に百姓、君に則（のっと）り以て自らを治むなり。君を養ひて以て自らを安ずなり。君に事りて以て自らを顯（あら）はすなり。故に、禮達して分定まる。故に、人、皆其の死を愛（をし）みて其の生を患（うれ）ふ。

故に、聖人は、天地に交はり、（天の時、地の利をはかり、）先祖や祖神、山川の諸靈と

共に、政を治める。そのあるがままを安んじることが禮の秩序である。楽しみを遊ぶことにより、民を治めることができる。つまり、天は時、四時（四季）を生み、地は財、資源を生み、人を生むものは、父（親）、師が教育を施す。天地人師、この四者を、君主は、正しく用ゐねばならない。そうすれば、君主は、過ちの無い地に立つ。

（天が明るいのは、人を明るく導くからではない。明るい天を見上げて人の心も明るくなる。君主が開明で公明であれば、百姓もこれに倣ふ。）故に、君主は明す所、人を明す者ではない。（地が財を生む、その力を生かすことで養ふことが出来る。）君主は養ふ所、人を養ふ者ではない。

（事を教へるのは師、）君主は事る所、人を事る者ではない。故に、君主が人を明（めい）さば過ちが起こる。人を養（やしな）はば不足する。人を事（つかうまつ）らば位を失ふ。故に、百姓は君主を手本にして、自らを治め、君主を養ひ自らを安じ、君主に事りて立身出世する。故に、禮は達し、身分が定まる。故に、人は皆、死ぬことを愛み、生きたいと思ふ。

■ 參は、まじわる、あずかる、ならぶ、はかること。■ 處其所存の存は、鄭注に察、孔疏に觀察、明かにする、と注される。處とは、安んじるところを云ひ、存はそのままの状態にとどめること。■ 玩とは、幼児に玉を握らせて、おもちゃにすること。■ 天生時 天が時、四時（四季）を生む。この四季を觀測して曆を管理することが王朝の重要な機能であった。■ 明とは開明、公明の明。■ 自らを顯はす、とは立身出世すること。■ 患其生とは、次条の詐（いつはり）、怒（いかり）、貪（むさぼり）に患ふこと。

故用人之知去其詐用人之勇去其怒用人之仁去其貪故國有患君死社稷謂之義大夫死宗廟謂之變故聖人耐以天下爲一家以中國爲一人者非意之也必知其情辟於其義明於其利達於其患然後能爲之

故に、人の知を用ゐて其の詐（いつはり）を去（す）て、人の勇を用ゐて其の怒を去て、人の仁を用ゐて其の貪（たん）を去つ。故に、國、患有れば君社稷に死すを、之を義と謂ふ。大夫、宗廟に死すを、之を變と謂ふ。故に、聖人耐（よ）く天下を以て一家と爲し、中國を以て一人と爲すは、之を意（はか）るに非ざるなり。必ず其の情を知り、其の義を辟（おさ）め其の利を明かにし、其の患に達し、然る後に能く之を爲す。

故に、人の知を用ゐ、（己の心を自省し、）詐を去（さ）る。人の勇を用ゐ、（義を果たし、）怒を去てる。人の仁を用ゐ、（相手を慮り、）貪を去る。國に患が起こり、君主が社稷に死す、（社稷（國）と君主は同体であり、己を護るとは、社稷を護るに等しく、そのために死ぬならば、）これを義と謂ふ。大夫が宗廟に死す、（臣下である大夫が君主の宗廟で死ぬ、それは身分不相応の死に場所であり、）變と謂ふ。故に、聖人が天下を一家と思ひ、中國を一人と思ふことができるのは、天下を一つにしようと思ふからではない。必ず天下

の情を知り、天下の義につかえ、おさめて、その利を明らかにし、その患に達し、そうすることで患を去る。（かくて天下は一つの家となり、中国はひとりの人のもとに治まる。）

■ 耐は能に通じる。■ 辟は罪に伏すことが原義、辟候は諸侯のこと、説文は「法」とし、召す、開く、つかえる、おさめる、等々多義に引伸される。

何謂人情喜怒哀懼愛惡欲七者弗學而能何謂人義父慈子孝兄良弟弟夫義婦聽長惠幼順君仁臣忠十者謂之人義講信脩睦謂之人利爭奪相殺謂之人患故聖人之所以治人七情脩十義講信脩睦尚辭讓去爭奪舍禮何以治之飲食男女人之大欲存焉死亡貧苦人之大惡存焉故欲惡者心之大端也人藏其心不可測度也美惡皆存其心不見其色也欲一以窮之舍禮何以哉

何をか人の情と謂ふ。喜(き)、怒(い)、哀(あい)、懼(く)、愛(あい)、惡(を)、欲(よく)、七つは學ばずして能くす。何をか人の義と謂ふ。父に慈(じ)、子に孝(かう)、兄に良(りやう)、弟に弟(てい)、夫に義(ぎ)、婦に聽(てい)、長(ちやう)に惠(けい)、幼(えう)に順(じゅん)、君に仁、臣に忠、十をこれ人の義と謂ふ。信を講(かう)じ睦(ぼく)を脩む、これを人の利と謂ふ。爭奪相殺す、これを人の患(うれへ)と謂ふ。故に、聖人の人の七情を治め、十義を脩め、信を講じ、睦を脩め、辭讓(じじやう)を尚(たつ)び、爭奪を去る所以は、禮を舍(お)き何を以てか之を治めむ。飲食男女、人の大欲(たいよく)の存するところ。死亡貧苦、人の大惡(たいを)の存するところ。故に、欲惡(よくを)は心の大端(たいたん)なり。人其の心を藏(かく)して、測度(そくたく)すべからざるなり。美惡(びあく)皆其の心に存し、其の色見へざるなり。一を以てこれを窮(きは)めんと欲し、禮を舍き何を以てせんや。

人の情とは何か。喜び、怒り、哀(かな)しみ、懼(おそ)れ、愛(いづく)しみ、惡(にく)しみ、欲、この七つは、學ばずとも誰でも出来る。人の義とは何か。父(親)は子を慈(いづく)しみ、子は父(親)に孝行し、兄は良、弟の模範となり、弟は弟、兄によく仕へ、夫は義、義を行ひ、婦は聽、夫の言をよく聽き、長じては惠、つつしみて勞(いた)はり、幼くしては順、先生(先に生まれた人)に従ひ、君主は臣下に仁を施し、臣下は君主に忠を尽くす。この十のものを人の義と謂ふ。信によりお互いを結び付け、親しみて和することを身につける。これを人の利と謂ふ。争ひ奪ひ相殺す、これを人の患と謂ふ。故に聖人が人の七つの情を治め、十の義を脩め、信を講じ、睦を脩め、辭讓を尚び、争奪を去ることができるのは、それぞれに対処するに禮を用ゐるからであり、他に何を以てこれを治め得ようか。飲食、男女の事は人の大欲の存(あ)るところ。死亡、貧苦は人の大惡の存るところ。故に、この大欲と大惡を、心の大端といふ。大欲と大惡が端となって人の情に表れる。人はその心を藏(かく)すために、心をはかり知

ることができない。美も悪も皆、その心の中にあり、その色は見へない。何か一を以て心の動きを窮めんとするなら、禮の他に何があるだろうか。

■ 惠 惠は恩惠の惠であるが、「政徳を惠（つつし）む」のごとく、戒慎するが原義。■ 十義について、左伝、昭公、二十六年に、「君令、臣恭、父慈、子孝、兄愛、弟敬、夫和、妻柔、姑慈、婦聽」とある。■ 講信 講とは両者を結合し和解させること、事理につうじること。信により人と人を結びつけること。脩睦 睦とは九族に親しむこと、和することを身につける。■ 辭讓 辭退すること、他人に譲ること。■ 端とは定められた位置に端然と位置を占めること、そこから秩序が生まれるので発端といふ（字統）。

故人者其天地之徳陰陽之交鬼神の會五行の秀氣也故天秉陽垂日星地秉陰竅於山川播五行於四時和而後月生也是以三五而盈三五而闕五行の動迭相竭也五行四時十二月還相爲本也五聲六律十二管還相爲宮也五味六和十二食還相爲質也五色六章十二衣還相爲質也

故に、人は、天地の徳、陰陽の交（かう）、鬼神の會（くわい）、五行の秀氣（しうき）なり。故に、天、陽を乗（と）りて、日星を垂（た）れ、地、陰を乗りて、山川に竅（けう）す。五行を四時に播（し）き、和して後に月生ずなり。是を以て三五にして盈（み）ち、三五にして闕（か）く。五行の動は迭（たがひ）に相ひ竭（つ）くなり。五行、四時、十二月、還（めぐ）りて本を相爲すなり。五聲（せい）、六律、十二管、還りて宮（きゆう）を相爲すなり。五味、六和、十二食、還りて質を相爲すなり。五色、六章、十二衣、還りて質を相爲すなり。

故に、人の身心は、天の徳と地の徳を備へ、陰と陽の交はるところ、祖先や祖神、山川神の霊の会合するところ、五行（木、火、土、金、水の元素の運行）の秀でた氣といふ。天は陽を乗（と）り、（陽氣は天に徳（のぼ）り、）日星となり、（諸星は北辰（北極星）を中心に天球に）垂れる。地は陰を乗り、（陰氣は地に降り、）山川となり（、財を生み生物を養ふ）。四季の運行は五行により土用が組み込まれ、（春（木）、春土用、夏（火）、夏土用、秋（金）、秋土用、冬（水）、冬土用となる。天と地の運行が）和して後に月（十二ヶ月）が生じる。三五、（五行三回、十五日）にして月は盈（み）ち、三五にして闕（か）ける。（新月から満月へ変化する）五行の働き、（満月から新月へ変化する五行の働き）が互いに尽きて一月（三十日）となる。日々、一月の運行（五行）、四季の運行（四時）、一年の運行（十二月）が繰り返され、この運行が基本となる。五聲、六律、十二管は、還（めぐ）りて宮（黄鐘）に戻る。（律が整うことにより、神、人が和し、季節の運行、度量衡、すべてが調和をする。）五味、六和、十二食は四季に応じて、その味付けに相応しい食材を基本にする。五色、六章、十二衣は四季に応じて、それに相応しい色の糸、織り方、あるいは素材を基本とする。

■ 乗 詩、大雅、文王に、「文の徳を乗（と）る」とあり、執ること。■ 竅とは莊子、応帝篇に、「人みな七竅あり」とあるごとく、目鼻耳口などの穴が原義、山川に竅すは、意味が不明、孔子家語に、「天は日星を垂れ、地は山川を載（の）す」とあり、この義に解される。■ 秀とは禾穀の穂が垂れ、花が咲いている形。秀でているが実る一步手前の未完。■ 播五行於四時 四時の運行、春（木）、夏（火）、秋（金）、冬（水）に、地である土の影響が強くなる各季節の終わりの18日間、土用を組み合わせて、春（木）、春土用、夏（火）、夏土用、秋（金）、秋土用、冬（水）、冬土用と季節が巡ること。■ 五聲は、宮、商、角、徵、羽の五音階。六律（陽）は、黄鐘、太簇、姑洗、蕤賓、夷則、無射、六呂（陰）は、太呂、夾鐘、仲呂、林鐘、南呂、応鐘。併せて十二律、笛では、六律も六呂、ともに6本ずつの竹管で合計十二管。淮南子、天文訓に曰く、「およそ十二律は、黄鐘を宮と為し、太簇を商と為し、姑洗を角と為し、林鐘を徵と為し、南呂を羽と為す。物は三を以て成り、音は五を以て立つ。三と五で八となる。卵生（鳥類）は八竅（あな）である故に、律が初めて生じるや、鳳の音を写す。故に音は八を以て生じる。」

律	音名	音程	数		月	コード	聲
黄鐘（こうしょう）	（二）	0	81	1	11	D	宮
太呂（たいりょ）	（嬰二）	0.57	76	2048/2187	12		
太簇（たいそう）	（ホ）	1.02	72	8/9	1	E	商
夾鐘（きょうしょう）	（へ）	1.59	68	16384/19683	2	F	
姑洗（こせん）	（嬰へ）	2.04	64	64/81	3		角
仲呂（ちゅうりょ）	（ト）	2.61	60	131072/177147	4	G	
蕤賓（すいひん）	（嬰ト）	3.06	57	512/729	5		
林鐘（りんしょう）	（イ）	3.51	54	2/3	6	A	徵
夷則（いそく）	（嬰イ）	4.08	51	4096/6561	7		
南呂（なんりょ）	（ロ）	4.53	48	16/27	8	B	羽
無射（ぶえき）	（ハ）	5.1	45	32768/19683	9	C	
応鐘（おうしょう）	（嬰ハ）	5.55	42	128/243	10		
黄鐘	（二）	6					宮

（黄鐘を1とする。下に生む場合2/3倍、上に生む場合4/3倍する。林鐘は1x2/3、その数は81x2/3=54。太簇は2/3x4/3=8/9、81x8/9=72。南呂は8/9x2/3=16/27、81x16/27=48。以下同様に順序どうり計算すれば表の相対比と数（四捨五入）が得られる。淮南子、天文訓、明治書院）■ 五味は、酸（すっぱい）、苦（にがい）、甘（あまい）、辛（からい）、鹹（しおからい）。六和は、五味に滑味（かつみ：なめらかさ）を加えたもの。十二食とは十二ヶ月の食のことを云ふ。禮記、月令に、「春、その味は酸・・・夏は苦味、滋味を薄くする・・・秋は辛味・・・冬は鹹味・・・土用は甘味・・・滑らかさを以て調和させる。」とある。■ 還りて質となすとは、その味付けに相応しい食材を基本にするといふことか。■ 五色は、青、赤、黄、白、黒。禮記、

月令に、「春は青衣・・・夏は朱衣(赤)、絺(ち:夏用)を着る・・・秋は白衣・・・冬は黒衣、裘(きう:毛皮)を着る・・・土用には黄衣を着る。」とある。六章は五色に玄を加えたもの(鄭注)。玄色で調和をさせることか。■ 還りて質となすとは、それに相応しい糸、織り方、素材を基本とすることか。

故人者天地之心也五行之端也食味別聲被色而生者也故聖人作則必以天地爲本以陰陽爲端以四時爲柄以日星爲紀月以爲量鬼神以爲徒五行以爲質禮義以爲器人情以爲田四靈以爲畜

故に、人は天地の心なり。五行の端なり。味を食ひ、聲を別ち、色を被りて生きる者なり。故に聖人、則(のり)を作(な)す。必ず天地を以て本と爲し、陰陽を以て端(たん)と爲し、四時を以て柄(へい)と爲し、日星を以て紀(き)と爲し、月以て量(りやう)と爲し、鬼神以て徒(と)と爲し、五行以て質(しつ)と爲し、禮義以て器(き)と爲し、人情以て田(でん)と爲し、四靈以て畜(きう)と爲す。

故に、人とは元来、天と地を受け継ぐ心であり、五行の端である。味をつけて食し、聲を区別して言葉や音楽にし、色のある衣を着て生きる者である。故に聖人が則(のり)を作るには必ず、天と地を本とし上下を知り、陰と陽を端とし生起を知り、四季を柄(指揮棒)とし変転を知り、日星を紀(もと)として運行を知り、月の満ち欠けにより日数を量り、鬼神を徒として迎へ、五行を質として生計をたて、禮と義を器として祭り、人情を田として育て、四靈を畜として犠牲にした。

■ 禮記、禮器に、禮を論じて、「衆の紀(もと)なり、紀散ずれば衆亂る」とある。器は祝禱の器で、これを列べて祈り、犬牲を用いて清めた祭器(字統)。■ 田は、説文に、「陳(つら)ぬるなり、穀を樹(う)るを田といふ。」田は古くは畋獵の意、詩、鄭風、叔于田(しゅくうでん)に、「叔ここに田(かり)す。」とある。■ 畜は三音あり、チクは積聚、キクは飼養、キウは六畜。

以天地爲本故物可舉也以陰陽爲端故情可睹也以四時爲柄故事可勸也以日星爲紀故事可列也月以爲量故功有藝也鬼神以爲徒故事可守也五行以爲質故事可復也禮義以爲器故事行有考也人情以爲田故人以爲奧也四靈以爲畜故飲食有由也何謂四靈麟鳳龜龍謂之四靈故龍以爲畜故魚鮪不滄鳳以爲畜故鳥不獠麟以爲畜故獸不狘龜以爲畜故人情不失

天地を以て本と爲す、故に、物舉(あ)ぐ可きなり。陰陽を以て端と爲す、故に、情睹

(み)る可きなり。四時を以て柄と爲す、故に、事勸(す)む可きなり。日星以て紀と爲す、故に、事列(れつ)す可きなり。月以て量と爲す、故に、功藝(う)る有るなり。鬼神以て徒と爲す、故に、事守る可きなり。五行以て質と爲す、故に事復(ふく)す可きなり。禮義以て器と爲す、故に事行はれ考有るなり。人情以て田と爲す、故に、人以て奥(あう)と爲すなり。四靈以て畜と爲す、故に、飲食由(もち)ゆること有るなり。何を四靈と謂ふ。麟(りん)、鳳(ほう)、龜(き)、龍(りよう)、これを四靈と謂ふ、故に龍以て畜(きう)と爲し、故に、魚鮪(ぎょゐ)滄(しん)せず。鳳以て畜と爲す、故に鳥獠(きつ)せず。麟以て畜と爲す、故に獸狘(けつ)せず。龜以て畜と爲す、故に人情失はず。

天地を本となすが故に、物は上に奉るべきとなる。陰陽を端となすが故に、かすかな兆しから情を睹(み)てとることができる。農事をはじめ四季を追って祭事を定めることにより、事に勤(いそ)しむことができる。日星の配列や運行の秩序に倣ふが故に、地の事もこれに倣ひて秩序づけられる。月により日数を知ることにより、暦にもとづき、田畑に種を蒔き、苗を植へることができる。祖先や祖神、山川の靈を迎へ、共にあることで、子孫に至り家系を守ることができる。五行の運行によりもたらされる自然の恵みは、毎年繰り返され、尽きることは無い。禮と義により敬(つつし)みて祭るがごとくに行はば、事は行はれ成る。人情、喜怒哀懼愛惡欲を田として育て、(あるひは、喜怒哀懼愛惡欲を獵し、)人の心は奥深く潜むことになる。聖人が四靈を使ひこなし畜となすが故に、飲食に用ゐる。何を四靈と謂ふか、麟(きりん)、鳳(ほうおう)、龜(かめ)、龍(りゅう)を四靈と謂ふ。故に、龍を畜となすが故に、龍に従ふ小魚も大魚も驚いて逃げることはない。鳳を畜となすが故に鳥は驚いて飛び去ることはない。麟を畜となすが故に、獸は驚いて走り去ることはない。龜を畜となすが故に、(龜ト用に飼はれ、上帝の意を確かめ、また、万物の情を類すことができるようになり、)人情を失ふことはなくなった。

■ 物可舉也 舉は與(四手)の下に手を加えた形、天地とは上下、物を上げる、天を敬すべきもの。■ 睹(ト)は覩(ト：みる)と同じ、陰微なものを見あらはすこと。■ 勸は農事にいそしむことが原義。■ 日星爲紀、太陽や星座の配置や運行、天の秩序に順じて。■ 月以爲量 月の満ち欠け30日で日数を定めることにより。■ 功有藝 功は農事の功が原義。藝(うえる)は、若木を種(う)えることが原義。■ 鬼神以爲徒 司徒は古くは司土で社に属す、氏子のこと 祖靈や山川の神を迎え受け継ぐこと。■ 五行以爲質 五行五元素の運行から物が生成される。■ 禮記、曲禮に、「生には父といひ、死には考といふ」とあり亡父のこと、文考、皇考、皇祖考とも用ゐる。ここでは攷(こう：かんがえる)の仮借、考成(なる)の義。■ 禮義以爲器 器は祭るに犬牲をもって清めることが原義。■ 人以爲奥 禮記、禮器に、「それ奥は老婦(炊事の神)の祭なり」とあり、後には家の奥深い西南の隅をいい、ひいて広く奥まった所をいふ。■ 四靈以爲畜 聖人が四靈を使ひこなししたこと。■ 飲食有由 由は用、備に通ず、詩、小雅、

小弁（しょうはん）に、「君子易（かろがろ）しく言を由（もち）ふること無かれ」とある。■ 魚鮪不淦 鮪は大きい魚類 淦は驚いて逃げ去ること。獠は驚いて飛び去ること。玃は驚いて走り去ること。■ 龜以爲畜故人情不失 龜は甲あるものを統べる。易経、繫辞伝に、「河、圖を出し、洛、書を出して、聖人之に則る」とある。龍馬が圖を負うて黄河から出、これにより伏羲が八卦をつくったとされる。史記本紀、三皇本紀 伏羲氏に「龍瑞有り」の記述あり、「伏羲は蛇身人首にして聖徳有り。仰ぎて象を天に觀、伏して法を地に觀、あまねく鳥獸の文と地の宜を觀、近く諸を身に取り、遠く諸を物に取り、始めて八卦を画し、以って神明の徳に通じ、以って万物の情を類す。」とある。書経の洪範に「天すなわち禹に洪範九疇を錫（あた）う。彝（不変の）倫攸（すなわち）斂す（秩序だつ）。初めの一に曰く、五行。次の二に曰く、五事を敬用す。次の三に曰く、八政を農用す。次の四に曰く、五紀を協用す。次の五に曰く、皇極を建用す。次の六に曰く、三徳を乂用す。次の七に曰く、稽疑を明用す。次の八に曰く、庶徴を念用す。次の九に曰く、五福を嚮用し、六極を威用す。」孔安国の伝によれば、洛書は洪範九疇をさす。洛水に背に文様のある神龜が現われ、九の数字が記されていた。禹はそれに基づいて、五行以下九の秩序をあきらかにし、その後、夏や殷に代々洛書として伝へられた。

故先王秉著龜列祭祀瘞繪宣祝嘏辭說設制度故國有禮官有御事有職禮有序故先王患禮之不達於下也故祭帝於郊所以定天位也祀社於國所以列地利也祖廟所以本仁也山川所以儋鬼神也五祀所以本事也故宗祝在廟三公在朝三老在學王前巫而後史卜筮瞽侑皆在左右王中心無爲也以守至正故禮行於郊而百神受職焉禮行於社而百貨可極焉禮行於祖廟而孝慈服焉禮行於五祀而正法則焉故自郊社祖廟山川五祀義之脩而禮之藏也

故に先王（せんわう）、著龜（しき）を秉（と）りて、祭祀の瘞繪（えいしょう）を列し、祝嘏（しゅくか）の辭說（じせつ）を宣（あ）げ、制度を設（まう）く。故に國に禮有りて、官に御（ぎよ）有り、事（こと）に職有り、禮に序有り。故に先王、禮の下（しも）に達せざるを患ふ。故に、帝を郊（かう）に祭（まつ）るは天位を定むる所以（ゆゑん）なり。社を國に祀（まつ）るは地利を列する所以なり。祖廟は仁を本とする所以なり。山川（さんせん）は鬼神を儋（ひん）する所以なり。五祀（ごし）は事を本とする所以なり。故に、宗祝（そうしゅく）、廟に在り、三公、朝（てう）に在り、三老（さんらう）學に在り。王、巫（ふ）を前にして史（し）を後にし、卜（ぼく）筮（ぜい）瞽（こ）侑（いう）、皆、左右に在り、王は中にして、心爲す無きなり。以て至正（しせい）を守る。故に、禮、郊に行はれて百神職を受く。禮、社に行はれて、百貨極はむ可し。禮、祖廟に行はれて、孝慈（かうじ）服す。禮、五祀に行はれて法則正し。故に郊社祖廟山川五祀に自（よ）り、義これを脩め、禮これを藏（ざう）すなり。

故に、先王は易占いの著や占いの龜を手にし、祭祀に際して犠牲を埋めて清め、幣帛を供へ、祝詞（のりと）を宣（の）べ、制度を設けた。故に、國に禮が有り、役人を御（も

ち) ひ、事をそれぞれに主(つかさど)らせ、禮に秩序をつけた。故に、先王は禮が下、臣民にも達しないことを患(うれ)へ、(誰にも分かるようにと、)立春には東の郊外、立夏には南の郊外、立秋には西の郊外、立冬には北の郊外で上帝を祭らせ、上帝が天位にあることを示した。社、土地の神を國として祀らせ、地の神の齋(もたら)す利を列挙するようにし、祖廟を祭るには、仁を本とするように、山川を祭るには、鬼神を儻すように、五祀を祭るには、その俗、慣習に事(つか)へることを本とするようにした。故に宗伯、太祝を廟に配し、三公を朝(庭)に配し、三老を(太子をはじめとする貴族の子弟を教育する)學問所に配して官となした。王は巫女を前にし、史官を後にし、卜官、筮者、瞽者、侑者、皆、左右に配し、王は、中を執り、自ら何かを爲そうとはせず、至正を貫き守る。故に、禮が郊に行はれると、百神が上帝より職を受(きづ)かることになる。禮が社に行はれると、百貨(さまざまな財)が(豊に齋され)極まる。禮が祖廟に行はれると、父が慈に子が孝に服す。禮が五祀に行はれると、法と則が正しく行はれる。故に郊、社、祖廟、山川、五祀の祭を行ふことで、義が脩められ、禮がその身に藏されることになった。

■ 著 易占いのめどき草、後は筮竹を用ゐた。 ■ 列祭祀瘞繪 大載禮(だいたいれい)、曾子天円(そうしてんえん)、割列禳瘞(かつれつじょうえい)の盧弁注(ろべんちゅう)に、「列は副冪辜(ひょくこ)なり」みえ、犠牲を割(さ)いて、悪邪を祓うこと(字統)。繪 詩、大雅、雲漢に、「上下に奠瘞(てんえい)す」とみえ、天に対して奠、地に対して瘞を用ゐる。繪はかとりぎぬ、ここでは幣帛のこと。嘏なるものは、祝(はふり、神官)、尸(かたしろ)の為に福を主人に致す辭。 ■ 官有御事有職禮有序 御は、天子の事(まつり)に御(もち)ふ、と用ゐられる。職は、左伝、襄十四年に、「則ち職として女(なんじ)これに由る」とは主(つかさど)ること。序は、秩序であるが、古の学校でもある。夏に校と曰い、殷に序と曰い、周に庠と曰ふ。 ■ 宗祝 宗伯と太祝。祭祀を主(つかさど)る官。三公 周では、太師(たいし)・太傅(たいふ)・太保(たいほ)。三老 三公経験者で太子を教育する。後には郷の学校レベルでも郷三老が配された。 ■ 巫は戦いにおいて最善面で敵陣を望見する。史は記録の官。瞽は樂官。侑は樂を以て食や酒を侑(すすめ)る膳夫(ぜんふ)。 ■ 王中心無爲也以守至正 太陽が特定の者を慮ることなく万民に照り輝くごとく、公正であること。論語、堯曰篇に、「舜よ、天の曆数は、爾の躬に在り。允にその中を執れ」とあり、中は天体観測の旗の象形、天の運行を観測し曆を明らかにすることでもある。

是故夫禮必本於大一分而爲天地轉而爲陰陽變而爲四時列而爲鬼神其降曰命其官於天也夫禮必本於天動而之地列而之事變而從時協於分藝其居人也曰養其行之以貨力辭讓飲食冠昏喪祭御朝聘故禮義也者人之大端也所以講信脩睦而固人肌膚之會筋骸之束也所以養生送死事鬼神之端也所以達天道順人情之大寶也故唯聖人爲知禮之不可以已也故壞國喪家亡人必先去其禮故禮之於人也猶酒之有藥也君子以厚小人以薄

是の故に、夫れ禮は、必ず大一（たいいつ）に本をなし、分れて天地と爲り、轉（てん）じて陰陽と爲り、變じて四時と爲り、列して鬼神と爲る。其の降（おり）るを命と曰（い）ひ、其の天に官（つかさど）るなり。夫れ禮は、必ず天に本をなし、動（どう）して地に之（ゆ）き、列して事（こと）に之（ゆ）き、變じて時に従ひ、分藝に協（かな）ふ。其の人に居るや養と曰ふ。其のこれを行ふは、貨力（くわりよく）、辭讓（じじやう）、飲食、冠昏（くわんこん）、喪祭（さうさい）、射御（しゃぎよ）、朝聘（てうへい）を以てす。故に、禮義なるは人の大端なり。信を講じ、睦を脩えて人の肌膚（きふ）の會（くわい）、筋骸（きんがい）の束（そく）を固（かた）くする所以なり。生を養ひ死を送り鬼神に事へる所以は大端なり。天道に達し人情に順ふ所以の大寶（たいとく）なり。故に唯聖人、禮の以て已（や）む可からざるを知ると爲すなり。故に、國を壞（やぶ）り家を喪（ほろ）ぼし人を亡（ほろ）ぼすは、必ず、先づ其の禮を去（す）つればなり。故に、禮の人に於けるや猶酒の麴（げつ）有るなり。君子以て厚く小人以て薄し。

このようなことであるから、禮は必ず宇宙（時空）の根源である大一を本とする。一なる大一が軽重上下に分れて天地となり、暗明回轉して陰と陽に分かれ、寒暑が四段階に變化して四季となり、犠牲により清め祭られ鬼神となった。それが地に降りるを命（天命）が降るといふ。それは天に官（のつ）る。禮というものは、必ず天を基本として、天の働きによって地に出で、犠牲を埋めて邪を払ひて祭事に出で、變化して季節、季節に従ひ、身分に分かたれた諸藝に適（かな）ふ。その人に居りては、養ふといふ。これを行ふとは、貨力、辭讓、飲食、冠昏、喪祭、射御、朝聘においてなされるものであり、故に禮義といふものは人の大端、信を講じ睦を脩めるところのもの、肌膚之會、筋骸之束のごとく、人と人を固めるものであり、生を養ひ、死を送り、鬼神に事へる大端であり、天道に達し、人情に順ふ大寶、（おおいなるくぐり穴）である。故に、唯聖人のみが、禮は欠くべからざるものと知る。故に、國を壞り、家を喪ひ、人を亡ふは、必ずその前に禮を去（す）てたことによる。故に、禮が人の世に於て果たす役割は、ちょうど酒における麴（麹）のようなものであり、君子は厚く行ひ、小人は薄く行ふ。

■ 大一 太一ともされ、易では太極。宇宙のはじまる未分化で根源的なもの。■ 列而爲鬼 諸神諸靈を潜めているようにと積される。あるいは、配列されて鬼神の諸靈となると積される。意味が通らない。犠牲により清め祭られ鬼神となると解した。 ■ 官は、つかさどる、のつとると訓じられる。 ■ 動は童と力からなり、童は僮僕（どうぼく）、働くの初文。身体をふるわせ心を動かすことでもある。力は耒（すき）の形で、僮僕が耒をもって働くこと。 ■ 之は趾（あし）あとの形で、歩の上半にあたり、足の前に進むことを示す、説文に「出づるなり」とする。 ■ 協 協は三つ耒をあわせて共耕すること、力を合わせる、かなふこと。協は説文に、「衆の同（とも）

に和すなり」、協は説文に、「同心の穌（わ：和）なり」とある。■ 分藝 周禮で六藝は、禮、樂、射、御、書、數。ここでは、貨力辭讓飲食冠昏喪祭射御朝聘の諸藝で身分に応じたもの。■ 肌は皮膚下の肉、膚は表皮。會は物を蒸すときの蓋、人の温もりある肌を皮膚がぴたりと覆ふさま。筋は筋肉、骸は骨。骨が筋肉と束（結ばれ）て動くことができる。■ 竇 円るい穴、禮記、月令に、「竇窖（とうかう）を穿つ」とあり、竇は円坑、窖は方坑。■ 麩 米や麦を蒸してねかし、かびを繁殖させたもの、麩（こうじ）、麩麩（さくげつ）。

故聖王脩義之柄禮之序以治人情故人情者聖王之田也脩禮以耕之陳義以種之講學以耨之本仁聚之播樂以安之故禮也者義之實也協諸義而協則禮雖先王未之有可以義起也義者藝之分仁之節也協於藝講於仁得之者強仁者義之本也順之體也得之者尊故治國不以禮猶無耨而耕也爲禮不本於義猶耕而弗種也爲義而不講之以學猶種而弗耨也講之以學而不合之以仁猶耨而弗穫也合之以仁而不安之以樂猶穫而弗食也安之以樂而不達於順猶食而弗肥也

故に聖王、義の柄、禮の序を脩めて、以て人情を治む。故に人情は聖王の田（でん）なり。禮を脩めて以てこれを耕し、義を陳（の）べ以てこれを種（う）ゑ、學を講じ以てこれを耨（くさぎ）り、仁に本づき以てこれを聚（あつ）め、樂を播（し）き以てこれを安んず。故に禮なるは義の實（じつ）なり。諸を義に協（あは）せて協（あは）ば則ち、禮、先王未（いま）だこれ有らざると雖も、義を以て起すべきなり。義は藝（げい）の分、仁の節（せつ）なり。藝に協（かな）ひ、仁に講ず。これを得るは強し、仁は義の本なり、順の體（たい）なり。これを得るは尊し。故に、國を治むるに禮を以てせざるは、猶ほ耨（すき）無くして耕すなり。禮を爲して義に本づかざるは、猶ほ耕して種ゑざるなり。義を爲してこれを講ずるに學を以てせざるは、猶ほ種ゑて耨（くさぎ）らざるなり。これを講ずるに學を以てし、これを合（あは）すに仁を以てせざるは、猶ほ耨（くさぎ）りして穫（か）らざるなり。これを合すに仁を以てし、これを安んじるに樂を以てせざるは猶ほ穫りて食（くら）はざるなり。これを安んじるに樂を以て順（じゅん）に達せざるは、猶ほ食らひて肥（こ）えざるなり。

故に、聖王は義を柄として、禮を序としてその身を脩め、人情を治める。つまり、人情といふものは、聖王の耕す田である。禮を身に脩めて耕し、義を陳（の）べ、これを種（う）へ、學を講じて耨（くさぎ）りして、苗がそだつようにする。仁に本づいて人々を聚め、樂をひろめて人々を安んじる。故に、禮を義の實といふ。これ（ある實）が義に照らして合ふならば、それに関する禮といふものは、先王が未だ定めたものでなくとも、義とさだめてよい。義は、諸藝における相違を分けるものであり、仁に照らし合はず符節である。藝に適ひ、仁により人々を和解、結合させることを得るものは強い。仁は義の本にあり、順という行為を統べ、これを得るものは尊い。故に、國を治める

に禮を用ゐぬは、耜なくして耕す、禮を為して義に本づかざるは、耕して苗を種えぬ、義を為してこれを講ずるに學を用ゐぬは、苗を種えて除草せぬ、これを講ずるに學を用ゐこれを照らし合はせるに仁を用ゐぬは、除草して收穫をせぬ、これを照らし合はせるに仁を用ゐ、これを安んじるに樂を用ゐざるは、收穫して食さぬ、これを安んじるに樂を用ゐ順に達せざるは、食して肥えぬようなものである。

■ 陳義 禮記、王制に、「大師に命じ、詩を陳（つら）ねてこれを覲（み）る」とある。しかしてこれを述べるを陳述といふ。■ 周禮、甸師（でんし）に「王藉を耕耨（かうどう）す」とあり、耨は除草すること。■ 節は竹の符節。周禮、小行人に、六節の規定があり、山国の虎節、土国の人節、沢国の竜節はみな金（青銅）、道路の旌節、門閥の符節、都鄙の管節は竹、遠行には金節、出入りには竹節を用ゐる。■ 體（体） 説文に、「十二屬を統ぶるなり」とある。骨肉すべてを供する意、体解とは牲を解いて二十一体とすること。本質に対する作用の関係を体用といふ（字統）。

四體既正膚革充盈人之肥也父子篤兄弟睦夫婦和家之肥也大臣法小臣廉官職相序君臣相正國之肥也天子以德爲車以樂爲御諸侯以禮相與大夫以法相序士以信相考百姓以睦相守天下之肥也是謂大順大順者所以養生送死事鬼神之常也故事大積焉而不苑並行而不繆細行而不失深而通茂而有間連而不相及也動而不相害也此順之至也故明於順然後能守危也

四體既に正しく、膚革（ふかく）充盈（じゅうえい）なるは、人の肥えたるなり。父子篤（あつく）、兄弟（けいてい）睦（むつ）み、夫婦和すは、家の肥えたるなり。大臣法（のつと）り、小臣廉（いさぎよ）く、官職相序し、君臣相正しきは、國の肥えたるなり。天子、徳を以て車と爲し、樂を以て御と爲す。諸侯、禮を以て相與（くみ）し、大夫、法を以て相序し、士、信を以て相考（な）し、百姓、睦（ぼく）を以て相守るは、天下の肥えたるなり。是を大順と謂ふ。大順は生を養ひ、死を送り、鬼神に事（つか）ふる所以の常（つね）なり。故に事、大いに積みて苑（つも）らず。並び行ひて繆（まと）はらず。細（こまか）に行ひて失はず。深くして通じ、茂（も）にして間（かん）有り、連（つら）りて相及ばざるなり。動きて相害せざるなり。此れ順の至れるなり。故に、順に明らかにして然後に能く危（き）を守るなり。

四體がよく發育し、皮膚に張りがありふくよかなことを、人が肥へているといふ。父と子は篤く、兄と弟は睦み、夫と婦が和すのは、家の肥へていること。大臣が法に則り、小臣が廉く、諸々の官職が互いの秩序を果たせば、君と臣は互いに正しく、國が肥へる。天子が徳を車となし、樂を御者とし、諸侯が禮により互いに参画し、大夫が法により互いの秩序を果たし、士が信にとり互いに仕事をなし、百姓が睦みて互いに

守り合はば、天下が肥える。是を大順と謂ふ。大順は、生を養ひ、死を送り、鬼神に事へるための常なり。故に、仕事がいくら積み重ねられようと滞り気がふさがることなく、並行して行ひて繆はりつくことなく、細かく行ひて何かを失ふことなく、深くたち入りて互に通じ、茂りて先が見えぬようでも間(隙間)があり、連りて互いに影響を及ぼすことはない。動いたとてお互いを害すこともない。此れを順が至れるといふ。故に順において(順の體が)明らかとなり、然る後に、危ふさから(お互いに身を)守ることができるようになる。

■ 四體既正膚革充盈 四體は両手両足。革は両手で獣の毛を剥いだ皮が原義、毛を取った皮のこと。膚革は毛の薄い皮膚。充盈は張りがあってふくよかなこと。■ 常 声符は尚、常の初文。不変の倫理を五常といふ。■ 苑 草の生えた放牧地が原義。物事が集まる所、「文苑」といふ。積もること、気がふさがることでもある。■ 繆 合わせてものをまといつけることから 誤謬(ごびゅう)に通じる。

故禮之不同也不豐也不殺也所以持情而合危也故聖王所以順山者不使居川不使渚者居中原而弗敵也用水火金木飲食必時合男女頒爵位必當年徳用民必順故無水旱昆蟲之災民無凶饑妖孽之疾故天不愛其道地不愛其寶人不愛其情故天降膏露地出醴泉山出器車河出馬圖鳳凰麒麟皆在郊楸龜龍在宮沼其餘鳥獸之卵胎皆可俯而闕也則是無故先王能脩禮以達義體信以達順故此順之實也

故に禮の同じからず、豊かならず、殺(そ)がざるや、情を持(たも)ちて、危に合はず所以なり。故に、聖王、順なる所以は、山なる者は川に居らしめず、渚(しょ)なる者をして中原に居らしめずして、敵(つひ)えず。水火金木を用ふと飲食は必ず時あり。男女を合せ、爵位を頒(わか)つは、必ず年徳に當(あた)り、民を用ふること必ず順なり。故に、水旱、昆蟲の災(わざはひ)無く、民に凶饑(きょうき)、妖孽(やうげつ)の疾(やまひ)無し。故に、天其の道を愛(を)しせず、地其の寶(たから)を愛しせず、人其の情を愛しせず。故に、天膏露(かうろ)を降し、地醴泉(れいせん)を出だし、山器車(きしや)を出し、河(か)馬圖(ばと)を出だし、鳳凰(ほうわう)、麒麟(きりん)、皆郊楸(かうそう)に在り。龜龍(きりょう)、宮沼(きゅうせう)に在り。其の餘の鳥獸(てうじう)の卵胎(らんたい)、皆俯(ふ)して闕(うかが)ふ可きなり。則ち是れ故(こと)無し。先王(せんわう)能く禮を脩めて以て義に達し、信を體(たい)して以て順に達す。故に此れ順の實なり。

つまり、禮が同じでなく、盛大でなく、省かなく、(それはその立場や状況によって、)情を保ち、危ふさに合はせるからである。故に、聖王が順とするのは、山に住む者を川に住ませることや、渚(なぎさ)に住む者を中原に住ませ、互いに疲弊せしめるような

ことをしない。水（冬）、火（夏）、金（秋）、木（春）、を用ゐるにあたり、また飲食においても必ず時（季節）に適ふようにする。男女を結婚させたり、爵位を与へるには、必ず年齢や徳に適合させる。民を用ゐるに必ずこの順に従ふ。だから、水害、旱魃、昆蟲之災は無い。民に凶作、饑飢や妖孽之疾も無い。故に、天は其の道を愛しまずに示し、地は其の寶を愛しまずに出だし、人は其の情を愛しまずに現す。つまり、天は葉を潤す露を降し、地はあまく豊かな泉を出だし、山は器具や乗り物を出し、黄河は龍馬と圖を出し、鳳凰、麒麟、皆郊外の野原に在り、龜龍は王宮の沼に在り、そのほかの鳥獸の卵胎、これらの瑞祥は皆、身を伏して、伺ひ見るべきもので、ことさら作為的なものでなく、自然な現象である。先王が禮を能くその身に脩め、義に達し、信をその身に體現し、順に達せられたことによる。故に此れを順之實といふ。

■ 禮之不同也不豊也不殺也 禮記、禮器に、「禮は多きを以て貴しと為す者あり。少なきを以て貴しと為す者あり。大なるを以て貴しと為す者あり。小を以て貴しと為す者あり。高きを以て貴しと為す者あり。下（ひく）きを以て貴しと為す者あり。文を以て貴しと為す者あり。素を以て貴しと為す者あり。多きを以て貴しと為すは、その心を外にする者なり。少なきを以て貴しと為すは、その心を内にする者なり。」とある。不同は同じでないこと。不豊は盛大にしないこと。不殺は省略しないこと。■ 持情而合危 禮記、禮器に、「古の聖人は、之を内にするを尊しと為し、之を外にするを樂と為す。之を少なくするを貴しと為し、之を多くするを美と為す。是の故に、先王の禮を制すること多くすべからず。寡（すくな）くすべからず。唯其れ稱（かな）ふのみにす。」とある。■ 敝は敗衣、やぶれごろもが原義。つかれさせる、おとろえること。■ 妖孽之疾 説文に、「衣服歌謡草木の怪、これを妖、鳥獸蟲蝗（いなご）の怪、これを孽といふ」とある。それらによる流行病、祟り病。■ 膏露 膏は、説文に、「肥ゆるなり」とある。骨肉の間のあぶら。膏雨は草木を潤す雨。膏露は葉を潤す露。■ 醴泉 醴は説文に、「酒一宿して孰（じゅく）するものなり」とある。君臣間の儀礼に多く用ゐられる。あまい、豊かの義。あまく豊かな泉。■ 器車 器は器具、車は乗り物。禹が器車を以て全国を巡り、溝を掘り、山を切り開き、排水し、盛り土し、洪水を治めた。■ 河出馬圖 龍馬が圖を負うて黄河から出、これにより伏羲が八卦をつくったとされる。■ 郊輶 郊は説文に、「國を距（さ）ること百里を郊と為す」とある。輶は、叢、くさむら。■ 闕は身をかがめてうかがい見ること。■ 無故 淮南子（えなんじ）、至術訓に、「上に故（こと）多ければ、則ちに詐多し」とあり、故は作為的の義があり、ことさらなこと。無故は作為的でないこと。

了 2009.01.09

修正 2009.03.15